

# パプアニューギニア，ウェワクの移住者集落

田 島 康 弘

(1992年10月15日 受理)

Migrant Settlements in Wewak, Papua New Guinea

Yasuhiro TAJIMA

To study the current trend of P. N. G. society I examined the urbanization process of Wewak. From the immigrants of three selected settlements I obtained information through a questionnaire covering their immigration process, their urban settlement life and the relation to their home villages. Material from government offices and research institutions was also used. The followings are a summary of results.

- 1) Wewak is the fifth city in population in this country, and a local center dislike to Port Moresby and Lae, because most migrants of Wewak have come from East Sepik Province.
- 2) Most of the immigrants had lived as subsistence farmers in their home villages. but over half of them had experienced monetary economy through working away from home.
- 3) Immigrants pay land rent to the landlord or government. The amount of rent paid depends on the settlement they live in. As some immigrants cannot find work, they are unable to pay rent on this land.
- 4) Their principle of life is communal. They marriage at home villages, and about 80 percent of them select their partners from the same villages as themselves. They want to live in their home villages in the future.
- 5) Many of them hope to manage a small shop in the future, although some respondents hope to live by carving or fishing in their home villages. It seems to me that the society of this country moves in a contradiction between communal elements and monetary ones.

## 第1章 研究目的

本研究は、筆者が1991年11月から12月にかけてパプアニューギニアで行った調査<sup>1)</sup>のうち、ウェワクでの調査結果について報告するものである。ラエにおいてもほぼ同様の調査を行ったが、これ

については別に報告した<sup>2)</sup>。

先に筆者は1989年にも、パプアニューギニアの都市の移住者集落に関する調査を行い、その結果を報告した<sup>3)</sup>が、都市集落をめぐる諸現象を通じて、この国の社会の基本的特色や本質を把握しようとする、研究の基本的な考え方や調査の目的については変わっていない。また、研究の方法についても、前回の調査と比較する上からも、あえてほぼ同様の調査を行った。

従来から行なってきた調査全体の総括を本報告で行う予定はないが、他との比較でとくにウェワクに特徴的な点については、当然考察の対象の1つとなるだろう。

以下、第2章ではウェワクの概観および戦後における移住者の流入と移住者集落の形成過程について扱い、第3章では調査方法や調査対象集落について概説したあと、第4章で調査の結果を述べ、第5章でまとめを行なうとともに、簡単な結語を述べたい。

## 第2章 ウェワクにおける移住者集落の形成過程

### 1. センサスによる概観

1980年センサスによるウェワクの人口は、パプアニューギニア人19,142人、外国人748人で、合計19,890人であり、この国で5番目に人口の多い都市である。1966年には8,945人であったのと比べると、14年間に2倍以上に増えたことになる。1990年センサスの結果は入手し得ていない<sup>4)</sup>が、移住者集落の居住者だけでも約46,000人とも推定されており<sup>5)</sup>、1980年以降も移住者が急増していることはたしかであろう。

つぎに、センサスから1980年に居住する人々のうち、外国人748人を除いた残りの人々の出身地を多い順にみると、東セピク74.2%、西セピク7.0%、マダン2.8%、モロベ2.2%などとなり、両セピクなかんずく東セピク出身者が圧倒的に多いことがわかる<sup>6)</sup>。すなわち、ウェワクの居住者はもっぱら東セピク出身者によって占められていることになる。

### 2. 移住者の流入と移住者集落の形成

戦後におけるウェワクへの移住者の流入過程は、次の3つの時期に区別することができよう。

第1期は戦後の荒廃から復興を旨とした時期で、その再建活動が外部からの移住者を引きつけたのである。

第2期は主に1950年代で、ウェワク居住者は商品作物の栽培のため、他地域からの移住者との間で居住地、共同作業、分配等について契約を結んだ。これにより移住者が流入した。Mary Talor Huber は、1958年に存在した20の移住者集落のうち、16~17がこうした契約によって存在した集落であったとしている<sup>7)</sup>。

しかし、この時点においても、まずはじめに契約があってそれから移住者がやって来るというよりも、とにかく移住して来た人達が居住のために既存の居住者(=土地所有者)と契約を結んだと

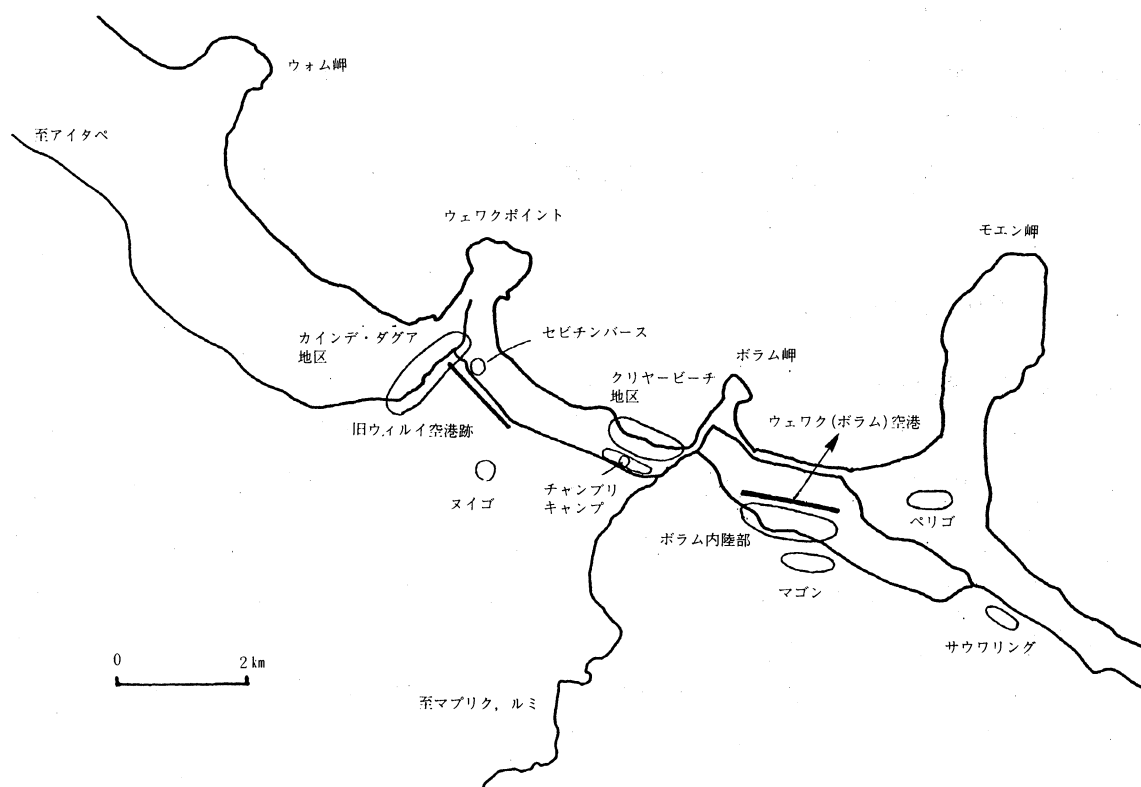
ということの方が実態であったことを、彼女も同時に指摘していることに注意すべきであろう。栽培されていた作物は、ココナツ、コーヒー、ピーナツなどであったが、作物栽培以外に、道路の建設や維持に関する契約を行う場合もあった。

第3の時期は1960～70年代から現在までの移住者が急増した時期である。この期の移住者の中には、土地所有者と正式に契約する場合もあったが、多くの場合は正式の契約は行われていない。しかし、この場合でも地主に対しては地代を現金または品物で支払ったり、地主の共同体の土地収益諸労働に対する協力を行ったりすることが期待されている。

また、この第3の時期を、政府による集落改良計画<sup>9)</sup>が開始された時期である1984年以前と以後とに区別することもできよう。

### 3. 移住者集落形成の地域的展開

つぎに、主として第3期の移住者集落形成の地域展開についてみよう。1960年代にウェワクの3つの地域で移住者集落の形成がみられた(第1図)。



第1図 ウェワクの移住者集落

その1つは、カインデ・ダグア地区である。この地区はウェワクの中心であるウェワク・ポイントに近く、1950～60年代の都市建設に伴って、50年代にガルフ地方から建設技術者(大工)が入り込み、彼等とセピク諸地域(カバイバス、ヤンゴル、ドレイキキール、ルミなど)からの移住者との協力で都市建設<sup>9)</sup>が進められ、このうちのセピクからの移住者が住みついたと言われる。

第2の地区は東方のクリヤビーチ地区で、この地区の住民は1)セピク川流域からの人々<sup>10)</sup>、2)東方沿岸部および島嶼部からの人々、3)ウェワク背後の山地部のヤングルからの人々の3種からなっている。土地はバビアックおよびクレメンディングが所有しており、移住者達は彼らから土地を借りている。

第3の地区はさらに東方のボラム内陸部で、この居住者の大部分はセピク川流域からの人々であるが、彼等の一部はその後、カトリック教会が地主のクレメンディングから土地を購入し、住宅地形成を計画していたヌイゴに移っている。

以上のほか、1970年頃には次の4つの地区でも移住者集落の形成がみられた。

- 1) クリヤビーチ背後の湿地帯。ここは西セピクからの人々が多いと言われる。
- 2) マゴン周辺(ボラム空港南側の空港背後地)。セピク川流域からとマプリクからの人々が多い。
- 3) ベリゴ地区 (エモン岬の背後地)
- 4) サウワリング地区 (最東方)

また、1970年代には前記3移住者集落の人口増加も顕著となり、とくにダグア道路周辺とクリヤビーチ周辺で増加が著しかった<sup>11)</sup>。

その後も移住者集落の拡大は続き、既存の移住者集落各地の拡大とともに、西方のアイタベ方面への道路沿いなどにも、新たな移住者集落が形成されている。

なお、1984年には政府による最初の移住者集落の改良計画が、ヌイゴで開始された。

### 第3章 調査の概要と調査集落

#### 1. 調査の概要と調査方法

調査は我々がウェワクに滞在した1991年11月21日から27日にかけて行われた。筆者は集落調査に入る前に、先ずNHC (National Housing Corporation)<sup>12)</sup>を訪問し、調査に対する協力を依頼した。次いで、彼等の協力の下にウェワクの都市計画を担当している「土地・都市計画局」を訪問し、移住者集落の状況の説明や1万分の1の都市集落図の入手などを行った。また、東セピクの統計局ではセンサス地図等の資料を入手した。

さらに、ブルーノ・カナウイ氏<sup>13)</sup>の協力の下に、車で市内の移住者集落の各地をまわり、その概況を把握した。

調査対象集落としては、1)諸地域からの出身者が混合しており、集落改良計画が行われたヌイゴ。2)同地域出身者のみで構成される移住者集落の典型的なものの1つで、クリヤビーチ背後に位置するチャンブリ・キャンプ (以下、チャンブリCと略す)。3)各地からの出身者からなる混合した集落でダグアに近いセビチンバースの3つを選択した。

集落選定理由は、以上述べた特色を考えたこと他に、調査上の便宜的な理由もあった。すなわち、ヌイゴにはラエの工科大学で紹介された前述のブルーノ・カナウイ氏がリーダーとして活躍し

ていたことがあり、また、セビチンバースについては、ヌイゴの調査ができない可能性があった<sup>14)</sup>ため、その代りとして選択した経過もある。なお、調査に際しては、ヌイゴではリーダーのカナウイ氏に、またヌイゴとチャンブリではNHCの所長ほか2人の職員の方々の協力<sup>15)</sup>を得ている。

具体的には、筆者が作成した2種類の調査票に基づいて、1)各集落のリーダーに対する、20項目に渡る面接・ききとり調査、2)各集落内の10名程度の世帯主に対する、26の項目に渡る面接・ききとり調査を行った。調査は被調査者に「若者小屋」やリーダーの家の近くに来ていただき、ききとりするケースが主であったが、筆者が被調査者の家を訪問してききとりを行う場合もあった。

## 2. 調査対象集落の概要

### 1) ヌイゴ

ヌイゴはウェワクでは唯一の政府により集落改良計画が実施された集落で、直線の道路の両側に家が並んで建てられており、土地測量が行われ、上水、下水も整備されている。居住者区割は348ブロック、すなわち348戸<sup>16)</sup>であり、人口は2,000人以上と言われる<sup>17)</sup>。これら住民の大部分は東セピク各地から来ているが、とくにアンブンティ周辺から来た者が多く、ヌイゴ集落内で出身集落毎に6つか7つのかたまりをなして居住していると言われる<sup>18)</sup>。

1961～2年頃最初の居住者が住みつき、60年代中頃に人口が急増した。当時のこの土地の所有者はカトリック教会で、60年代にこの教会により集落改良計画が進められたが、土地条件の悪さ<sup>19)</sup>などのため、なかなか進まなかった。1984年から政府による集落改良計画が実施され、前述したインフラストラクチャーが整備された。

地代が政府に対して支払われており、従来は1戸当り年間18キナ<sup>20)</sup>であったが、最近これが50キナに引上げられ、以前でさえ地代が支払えない者もいた状況がさらに悪化し、国家に対して数千キナの負債をかかえている。

集落費については、出身者集団によってはいくらかづつ徴集しているところもあるが、集落全体としては徴収していない。しかし、集落として自分達が経営するマーケットを持っており、ここからの収入が集落の諸経費に当てられている。

このほか、最大の祭りである「シンシン」は集落が組織するが、おどりなどの行動単位は出身者集団であること、教会にも墓はあるが、死者が出たときは普通は郷里へ運ぶことなどのこともつけ加えておきたい。

### 2) チャンブリキャンプ

チャンブリCはクリヤービーチ背後の湿地帯に形成された、いくつかの移住者集落のうちの1つである。名前の示すとおり、ここの住民の出身地はセピク川中流域にあるチャンブリ湖の近くで、調査時点では42戸が居住していた。1戸当りの平均人数を今仮にヌイゴと同じく6.5人と仮定すると、約270人ほどの集落ということになる。集落内では「ノウィ」と「ニアメイ」の2つのクランがあり、前者が14戸、後者が28戸である。

1966年に、最初の居住者がこの地に住みついたと言われ、その後次第に来住者が増えた。土地の所有者は背後の斜面に以前から居住していたクリヤービレッジの人々で、彼等に対して移住者達は1戸当り月に3キナ、年間36キナを地代として支払っている。

元来、セピク川流域の住民は木彫りの技術を持っているが、チャンブリCの住民はその技術においてとくにすぐれており、有名な「チャンブリマスク<sup>21)</sup>」の製作と販売を行っている。このほか、同様の手作業で「バスケット<sup>22)</sup>」を生産・販売しており、木彫りは男性、バスケットは女性の仕事となっている。

集落費については、特別に必要なときには集めるが、定期的な徴収はしていない。

### 3) セビチンバース

セビチンバースは、ヌイゴの北方、旧ウィルイ空港跡地周辺に存在するいくつかの集落の中の1つである。家の数は53戸(約350人)で、これを出身地別にみると、セピク川中流域のティンボリが15戸、マプリク南方のワウラが20戸、マプリクが3戸、それに西セピクのルミが15戸であって、各地からの出身者が「混合」してできた集落である。

1971年に最初の移住者がこの地に住みつき、その後徐々に戸数が増加していった。

地代は土地所有者であるボイケンの人々に、1戸当り年間10キナを支払っているが、中には地代を支払えない者もいる。集落費は徴集していない。

以上みたように、1)集落改良計画実施の有無でみると、ヌイゴは実施されたが他の2つは実施されていないこと、2)出身者集団でみると、チャンブリCはほぼ同一の集落出身者からなるのに対し、他の2つは各地の出身者が「混合」していること等の整理ができよう。ただし、「混合」と言っても、その内部ではいくつかの出身者集団に分けられることについては既に指摘した通りである。

### 3. 同地域出身者の都市居住形態

同一地域出身者が、ウェワク内で住む場合、一カ所のみにかたまわって住むとは限らず、むしろ数カ所に分散して居住することの方が一般的な様である。一つの例として、西セピクのルミ出身者の場合をここに示そう。全体で150戸程がウェワク内に居住しているが、具体的には次の7カ所に分散居住している。1)マンゴロキャンプ(カインデ北隣)50~60戸、2)マパウ(カインデ東隣)30戸、3)ウィルイ(旧ウィルイ空港南側)17~18戸、4)セビチンバース(旧空港北側)15戸、5)ヤワロサ(西方)15戸、6)コモックス(旧空港北側)10戸、7)ボラム(東方、現空港隣)6戸<sup>23)</sup>。

この理由についてはよくわからないが、一方では集住の傾向を強く示すと同時に、他方ではこのような数カ所への分散居住も一般的なようである。ただ、上のルミ出身者の場合、見方によっては5)のヤワロサと7)のボラムを除くと、他のほとんどすべてはカインデおよび旧空港地区周辺に集中しているとも見ることができよう。とすると、圧倒的多数は一カ所集中とみられなくもない。

## 第4章 調査結果

調査項目は26の小項目にわたっていたが、今これを整理するに当り、1.被調査者の属性、2.移住のプロセス、3.移住前の状況、4.現在の生活、5.郷里との関係、6.採来について、の6つの大項目にまとめて述べることにしたい。

### 1. 被調査者の属性

既述のように被調査者は全員世帯主であり、性別ではヌイゴの1人が女性である他はすべて男性である。ここでは、彼等の生年（年齢）と誕生地について示しておきたい。

#### 1) 生年（年齢）

全体としては1930年生まれ、すなわち50代が最も多く、全体の約半数を占めている（第1表）。次いで30代、さらに40代の順となっており、比較的高年齢者の比重が高かった。集落別ではとくにヌイゴでこの傾向が強いが、これは、この集落の相対的古さやボラム内陸部からの移転者が多かったこのなどによるのであろう。

生年	N	C	S	計	%
1926~30	1		1	2	7.1
31~35	2	3		5	17.9
36~40	5	3	2	10	35.7
41~45		1		1	3.6
46~50	1		2	3	10.1
51~55	1	1	2	4	14.3
56~60			2		7.1
61~65					
66~70			1	1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

注) Nは Nuigo, Cは Chambri Camp, Sは Sevitimbers の略

#### 2) 誕生地

各集落居住者の出身地に関する全体状況については既にみたが、被調査者のみについて具体的にみると、ヌイゴでは、アンゴラムの1人以外はすべてセピク川中流域から、チャンブリCでは全員がチャンブリから、セビチンバースでは西セピクのルミが半数と多く、セピク川流域も少ないことなど、集落毎の特色がやはり目立っている（第2表）。これらの傾向は、先の集落全体の傾向とほぼ比例すると言えようが、ただ、ヌイゴではアンブンティ周辺というよりも、被調査者の方はアンブンティから下流域に向う地域の出身者が多いこと、また、セビチ

	N	C	S	計	%
Chimbien	3			3	10.7
Gaikorobf	2			2	7.1
Angoram	1		1	2	7.1
Tegawi	1			1	3.6
Yamok	1			1	3.6
Wengi Mangua <sup>1)</sup>	1			1	3.6
Aunalup <sup>2)</sup>	1			1	3.6
Chambri		10		10	35.7
Japanaut			1	1	3.6
Sengo			1	1	3.6
Maprik				1	3.6
Lumi <sup>3)</sup>			4	4	14.3
計	10	10	8	28	100.0

注1) この地名は地図上では見らず、Timbimanguaのことかも知れない。とするセピク川中流域である。

2) この地名も地図上では見当たらないが、他の諸事情からセピク川流域と推測した。

3) Lumiだけが西セピクであり、他はすべて東セピクである。

4) ChimbienからSengoまではセピク川中下流域の地名であり、この地域の住民は一般にリバー・ピープルと呼ばれている。

ンバースではマプリク地域の出身者が被調査者には少ないことなどが異なると言えよう。

## 2. 移住のプロセス

ここでは、移住時点での基礎的な事実やその際の諸問題について、以下の8項目に渡って整理した。

### 1) いつ移住したか (移住年)

全体としては1960年代が最大で、70年代がこれに次ぎ、両者で全体の75%を占めている (第3表)。これを集落別にみると、ヌイゴでは1950年代後半から60年代前半に、チャンブリCでは60年代後半から70年代に、セビチンバースでは70~80年代に多いという傾向が示されている。

年	N	C	S	計	%
1941~45	1			1	3.6
46~50					
51~55					
56~60	3	1		3	10.7
61~65	4		1	5	17.9
66~70	2	5	1	8	28.6
71~75		2	1	3	10.7
76~80		3	2	5	17.9
81~85			2	2	7.1
86~			1	1	3.6
	10	10	8	28	100.0

### 2) どこから来たか (前住地)

第4表は、誕生地を示した第2表とかなり似ているが、比べてよくみると、チャンブリの居住者でマプリクやブーゲンビルから来た者がいることなど、多少の違いもある (第4表)。しかし、大部分が東セピク、中でも、リバーピープルと呼ばれているセピク川流域からの人々であることに変わりはない。

第4表 前住地

前住地	N	C	S	計	%
Chimbian	2			2	7.1
Gaikorobi	2			2	7.1
Angoram	1		1	2	7.1
Wengi Mangua	1			1	3.6
Yamok	1			1	3.6
Tegawi	1			1	3.6
Aunalup	1			1	3.1
Chambri		8		8	28.6
Japanaut			1	1	3.6
Sengo			1	1	3.6
Maprik		1	1	1	7.1
Lumi			4	4	14.3
Manus <sup>1)</sup>	1			1	3.6
Bougainville <sup>2)</sup>		1		1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

注1) Manus Province

2) North Solomon Province

### 3) なぜ来たか (来住理由)

来住理由をみると、仕事関係で来た者が全体の過半数を占めて最も多い (第5表)。これは当然であろう。むしろ、これ以外の理由が比較的多いことが注目され、とくにチャンブリCでこの傾向が強い。つまり、チャンブリCでは仕事以外の目的で来た者が多いという事であり、この理由は恐



